

50

日本における『茶経』の受容について

——陸羽の卒年と交流を記す資料ほか——

岩間眞知子

茶の湯文化学会／美術史学会

現存最古の茶書『茶経』（761年ころ）は、唐代に陸羽が著し、それはAll about Teaとも言うように、茶の起源、茶の異名、製茶道具、製茶方法、飲茶道具、茶の煮方、飲み方、茶に関する古文献、茶産地などを網羅する。

著者・陸羽の卒年は、『新唐書』巻196 隠逸の陸羽伝に「貞元末卒」とあり、これまで貞元20年とみなされてきた。日本の茶経研究者・布目潮風氏は中国・元の梅屋念常編『仏祖歴代通載』巻14に徳宗の癸未（貞元19年—803）に「隠士陸羽卒」とあると指摘するが、20年説を採用している。その『仏祖歴代通載』の五代までの記事は、南宋・石室祖秀による『隆興仏教編年通論』（隆興2年—1164）を踏襲・抄録したものである。この『隆興仏教編年通論』は、編年体で主要な高僧の略伝を記述する仏教史の嚆矢と評価されるが、中国では失われ現存しない。一方、日本には宋版を覆刻した五山版（宮内庁書陵部、前田育徳会）ほか、江戸時代に版行されたものが数種あり、更の中野達慧ら編『大日本統蔵経』（1905～1912）に収録されている。

この『隆興仏教編年通論』巻20には陸羽の卒年を貞元19年と明記し、略伝には従来の陸羽伝にはみられなかった、僧標との交流などの記事がある。巻19には陸羽と交流のあった皎然、僧標らの略伝があり、僧標を詠んだ陸羽の詩も収録される。これらは従来知られていなかった、陸羽に関する貴重な資料といえるのではないだろうか。

『茶経』の成立と伝来については多くの研究があり、中国の沈冬梅氏の研究成果（『茶経校注』2006年 中国農業出版社）は、資料を駆使して、その鈔本と版本の状況を詳述している。一方、日本では、『茶経』がどの時代にどのような状態で渡来し、それが受け入れられ、広まったかは殆ど検討されていない。

鎌倉時代の栄西の著書『喫茶養生記』（1211, 1214年）には、『茶経』の記事が収録されている。それは恐らく日本で最も古い引用と考えられるが、『茶経』そのものからの直接の引用ではなく、『太平御覧』からの孫引きであると森鹿三氏は立証された。同じく鎌倉時代の医書『万安方』（1313～27年）にも『茶経』は引用されるが、こちらも『茶経』からの直接の引用ではなく、『茶経』や『茶譜』を収録する宋代の『図経本草』、あるいはそれを収録する『証類本草』（『大観本草』）からの孫引きであろう。このように『茶経』は、養生書や医薬書に引用されて、日本に伝えられている。

神奈川県金沢の称名寺に、『茶経』を記した文書（6769/1867 称名寺蔵）がある。文中に「陸羽茶経に茶有五名」とあり、茶の異名「莽」に「セム」、「苻」に「リュウ」と振り仮名が添えられる。「苻」の文字は、本来の出典『茶経』にはない。栄西が引用したとされる『太平御覧』にあるが、振り仮名は『茶経』にも『太平御覧』にもなく『喫茶養生記』再治本に見える。そこで称名寺のこの文書は、『喫茶養生記』再治本を写したと考えられ、鎌倉時代に少なくとも僧たちは『喫茶養生記』を写し、『茶経』の存在も知っていたと言えよう。栄西の『喫茶養生記』の刊行は、江戸中期の元禄7年（1694）柳枝軒版を待ったため、江戸時代まで普及しなかったとも言われる。確かに書籍の刊行が盛んとなる江戸中期とは比較にならないが、それ以前にも僧たちは『喫茶養生記』を写し、読んでいたと分かる。史料編纂所本は永仁5年（1297）に伝写されたものであり、室町中期の東福寺の禅僧・季弘大叔の日記『蔗軒日録』文明18年（1486）には『喫茶養生記』の貸し借りも記されている。

次に五山僧の西笑承兌は「南陽稿」（統群書類従・第13輯下）に、「陸盧（陸羽と盧同）の風を慕ふ者、往々これあり」「大相国、箇の中に座し、有道の名士を集め、茶経を談じ、茶の香色を論じ、風味を賞す。」と、豊臣秀吉が慶長3年（1598）に作らせた学問所で、陸羽や『茶経』の話をしたことを伝える。織田信長・秀吉ら茶の湯全盛時代に、『茶経』そのものも将来されていたのではないだろうか。